毎日新聞（夕刊）（第3種郵便物認可）
新聞定価1ヵ月3,925円(本体3,738円)・1部売り(消費税込み) 朝刊130円 夕刊50円

4版　2003年（平成15年）6月3日（火曜日）

山谷にホスピス

末期がんで身寄りなく ボランティアが支え「ここは極楽」

第2の施設も計画

入居待ち20人、悩みは資金不足

元NPO事務局長が昨秋開設

「ホームレスや身寄りのない人たちに、終のすみかを」。一人の男性が一念発起し、簡易宿泊所が建ち並ぶ東京・山谷にホスピスケア施設を開いて8カ月になる。妻やボランティアに支えられ、これまでに4人の末期がん入居者をみとった。高齢化や不況の波が押し寄せるこの街で活動は静かな反響を呼び、第2の施設建設も目指している。

「妻子と別れ、病気で土木作業もできなくなった。この施設がなければ路上生活をしていたかもしれない。ここは極楽と言ったら言い過ぎかな」。64歳の男性入居者が施設長の山本雅基さん(39)にほほ笑みかける。末期のすい臓がんとは思えないしっかりした口調だ。

鉄筋4階建ての「きぼうのいえ」には、がん、脳こうそく、糖尿病などで末期と診断された21人が暮らしている。部屋はすべて4・7畳の個室。洗面台、冷蔵庫、ビデオ付きテレビ、ナースコールが備え付けられ、ドアには表札もかかる。約20人のボランティアが世話をし、3人の医師が診療する。「最期まで自然に」と願っていた70歳の男性は先月28日、大学生ボランティアの手を握りながら眠るように亡くなったという。

山本さんは難病の子供たちを支援するNPO（非営利組織）の事務局長だった。2年前に退職し、「ホームレスのような境遇に陥る弱さは誰にもある。残された人生を安らかに過ごしてもらう手助けができれば」と決意。昨年1月、看護師だった妻美恵さん(45)と山谷に移り住み、1億5000万円の借金をして、同10月に施設をオープンした。

東京都山谷対策課によると、山谷の簡易宿泊所に住む約5500人のうち、半数以上が生活保護を受けている。平均年齢は4年前の調査で59・7歳。高齢化はいっそう進む。「きぼうのいえ」には20人以上が入居待ちの状態で、3年後をめどに200人規模の第2の「いえ」の建設も計画している。

しかし、悩みは運営費不足。公的補助はなく、各入居者が生活保護から支払う月額12万3000円のほかは寄付が頼りだ。この施設で末期がん患者の主治医を務める「ホームケアクリニック川越」の川越厚院長(56)は「新しい試みを成功させてほしい」とエールを送る。問い合わせは「きぼうのいえ」（03・3875・7523）。【川俣享子】

「体調はいかがですか」。末期がんの入居者に話しかける施設長の山本雅基さん＝東京都台東区清川の「きぼうのいえ」で